

Title	ミスマッチによる飼い殺し-ビッグビジネスにおけるノンコア事業の実態-
Sub Title	
Author	緒方, 慎(Ogata, Shin) 浅川, 和宏
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2007
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2007年度経営学 第2207号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002007-2207

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	浅川研究会	学籍番号	80630186	氏名	緒方 慎
(論文題名)					
ミスマッチによる飼いきれし・・・ビッグビジネスにおけるノンコア事業の実態					
(内容の要旨)					
<p>80年および90年代「構造改革」「リストラ」「脱多角化」「選択と集中」など様々な言い方があるが多くの企業が「過度の多角化」を修正してきた。企業は毀損した企業価値を回復すべく事業売却・分社化・買収・提携などあらゆる手段を講じて対策を打ってきたはずである。そうした背景がある上で未だに多くの企業が非主要事業いわゆるノンコア事業を抱えている。事業再編の波の中で「継続保有」という判断が下されたということはそのノンコア事業は企業にとって何らかの非常に重要な意味づけがなされた事業であると考えて然るべきだろう。</p> <p>しかしながら現実にはノンコア事業は厳しい事業環境の中で重要な意味づけがなされて企業内に残された事業として相応しい経営上の取り扱いをされているのだろうか？</p> <p>「ノンコア事業」と定義されたことでその事業の伸びしろ・成長余力を封じ込められていることはないだろうか？そうであるならばこれは「飼いきれし」というべき事態に陥っているのではないかと。なぜならば成長性の高い事業において多角化企業の中のノンコア事業部門が伸び悩んでいるのを目にすることがあるからである。</p> <p>本研究ではノンコア事業に焦点を当て、これまでの調査にはない各企業の意識に触れる調査を行う。そして意識と業績指標との因果関係を明らかにすることで企業の2000年代現在の事業ポートフォリオにおけるノンコア事業の位置づけ及びそれに取り組む姿勢が合理的なものであるのかどうかを議論していく。本研究ではFortune Global 500企業を一つの調査対象としあらゆる産業分野をまたいで「ノンコア事業」に関する実態の分析を行いその特性の一般化を試みる。その上で特定業界（携帯電話端末業界）を調査し、これが前述の調査結果とフィットするかどうかの検証を行うことで本研究の精度及び説得力を高める。</p>					